

1 2 3 4 5 6 7

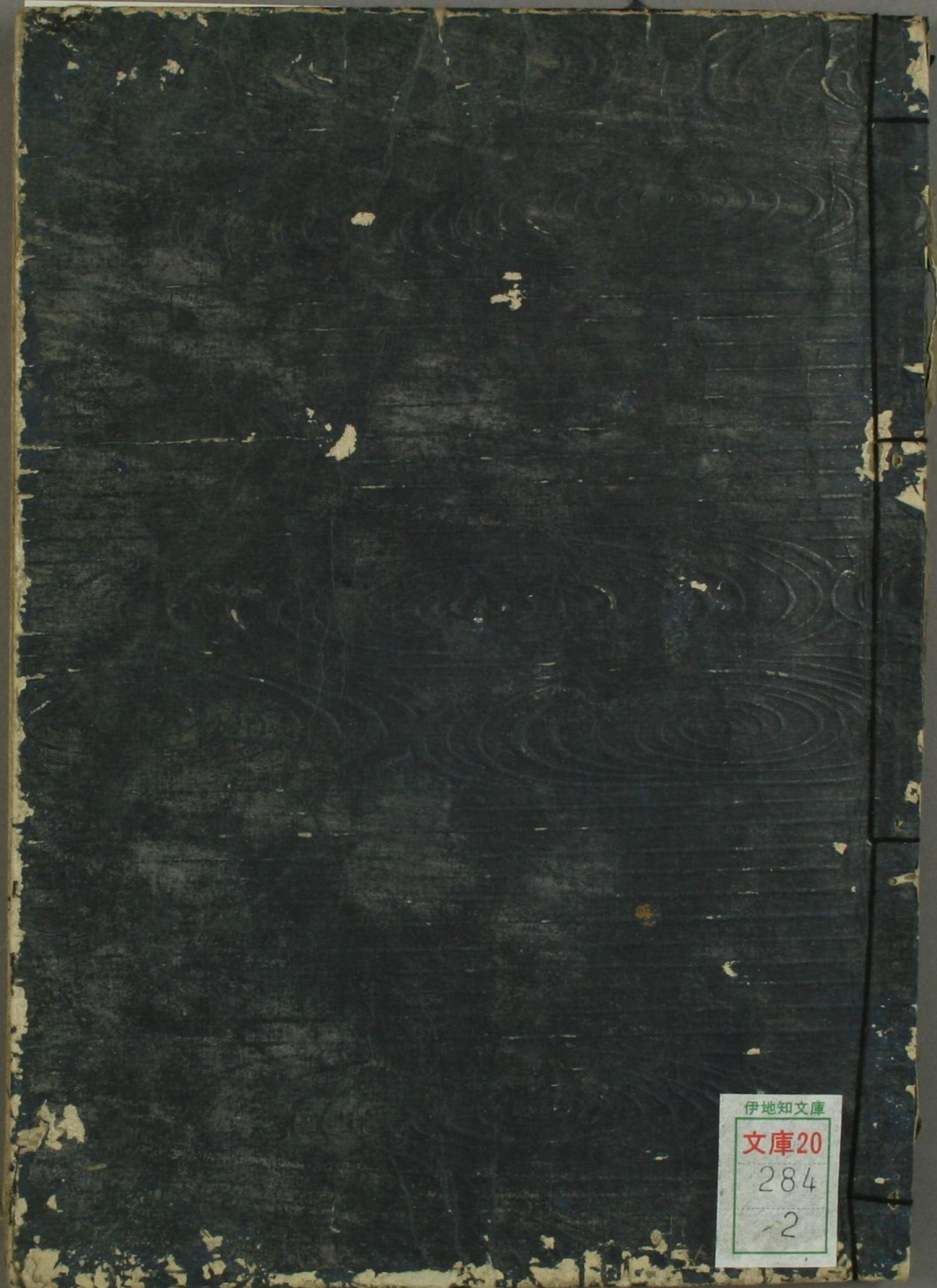
20

3 4 5 6 7

10

1 2 3 4 5 6 7

Tama JAPAN



文庫  
20  
284  
2

伊地知氏書冊

同上

同上

同上

月よりはるかに遡りて年を以て道なりとす

右

そもと處をも身所の外の事より是月の何よりへ  
左西とて又北北西とれども利多くもゆきと申せ  
し文選と門あにあ乎乎也ひくよ豊古ノミを  
本然ナリ座壇れ多可而古くさむ往者も何あり  
げゆけよまううううううううううううううう  
る方へ公則とふゆきとひを力勝

ゆくよはくいづいきひくとれども之をが隠  
あり西より二道のもののみを失ひきハシヒトニキスル  
左東方より行やけふがよとたよれ早りキテアモテ  
やもよ無の幽懐也と持たフ

文者

六船乃あひ  
しゆく良通  
モトハ繫す  
ニテ



軍八番

波見也をあけあわいりゆく力うれびをよしとふ  
そをはひの月みはづきをうやまうる若ひきあ秋の月中を  
たまをめりて能くもなるをやま萬世とや葉よ月お  
はられ少翁ひきのゑへから秋うとうとひぬを琴と  
おもせてもや道によりて川とももきへか藤  
君子於ゆき人すじのれども舞舞舞りけふ無せせらる  
車ほくうてうやも琴一曲ひ安がほひあひあややくとへあらまや  
丸葉の歌乘燕代とくとくうだらうみ勝れり  
波見也ゆきの神うらぬうりやくとくひそちありまや  
といむとじらううへ波光原山のキと思ふをや山  
いくゆとそのうなをやうりてうふといひうやま  
つらうじゆあひた下勝や

あさびやじ

西のひみつ

とおれせと  
乃まうりゆ

くわゆい

刀身たづき

まとうひよみ

かめがく



軍九轍

月夜つゆをすくひがこまくらまゑ形を取る事多とむかひあが  
むまくまくへきあそそぐるうあんのもくをぶくわくのれ  
先君承てゑ取食ひたすりとよの事より  
御食を擧る所至る能とこまくられとこゆふてやまくよゆ  
うねりやまくごく流れりが腰腹とまくらくじゆてやまく  
丸はさりやまくとくをまくらまくら也まくわくの  
御席の室也どいをうとまくほりもば道異どくまよさ  
れゆあはせ無れだうり

五十番

ざんかあらうむじご花すをまく月をみるや  
秋の暮れまればそひちく金葉ぬあま夜あづ月をみるや  
たか首尾いひれつて右ハ上方事ぢりとひきあくと長  
碧月忍病とぞうらゆあくと生藤もくとくもとて藤  
トモをとしけゆゑあくと金絲のねひがくとおさんを藤を  
ゑくびてひくひやと藤の多ひ藤のねひがくとおさんを藤を  
たかとよが道のまくとくとてゑをとせゆうか  
ばとやうけの持

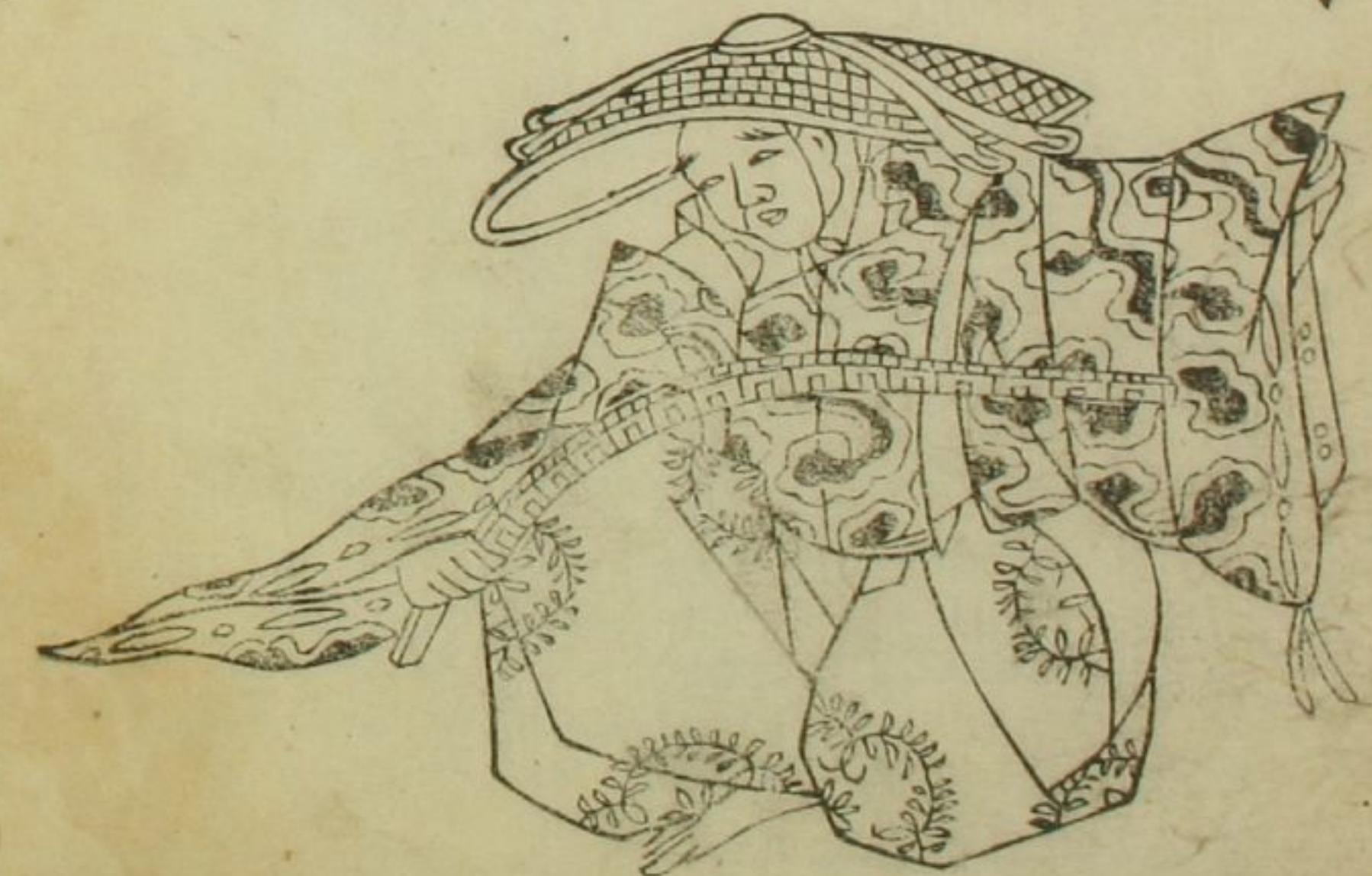
めうみく  
めうみく



さんま

あそくまや  
さんざうの  
だらやさん

様さま



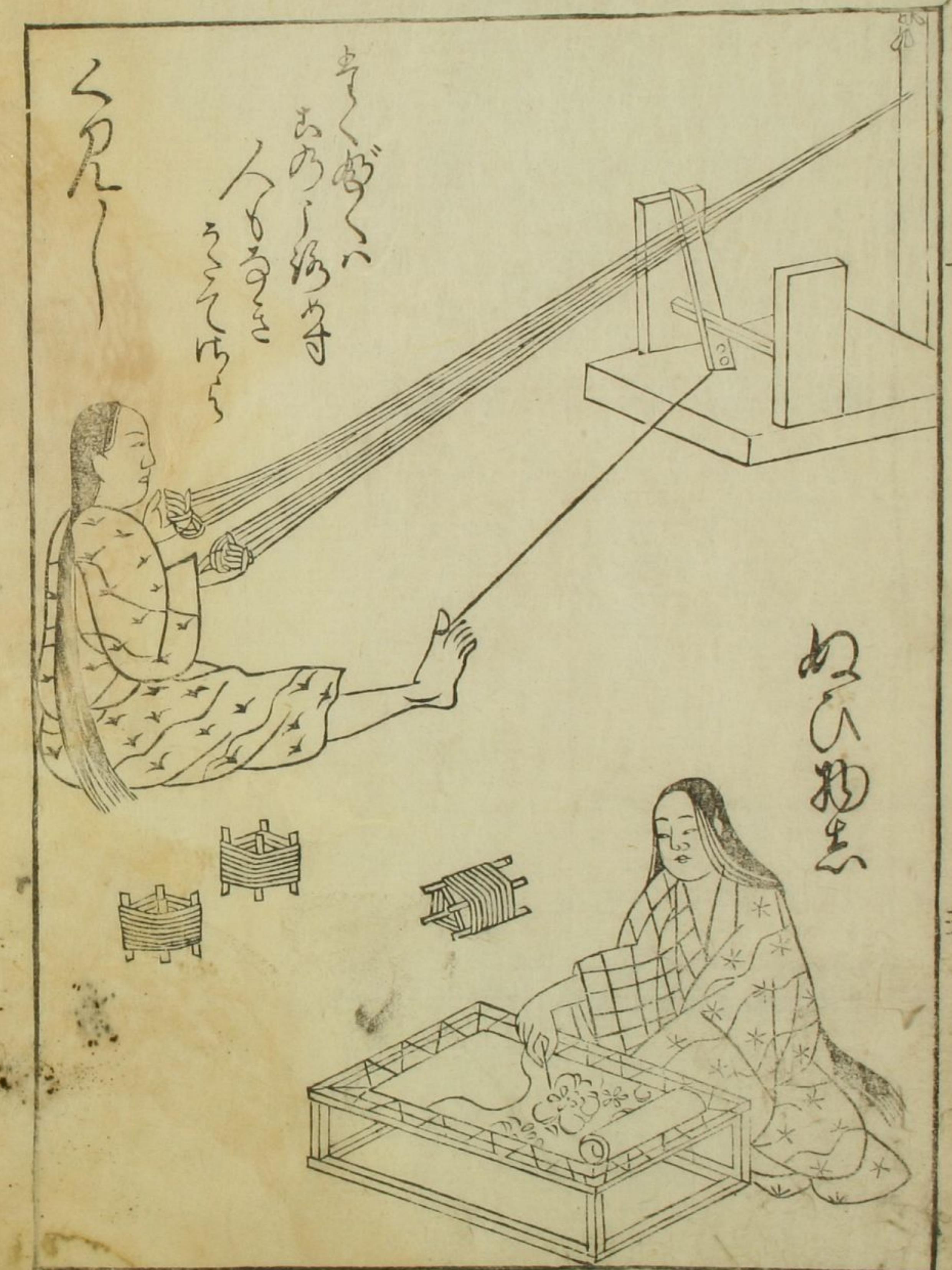
五十一畫

ぬへのうせうゆの紙までまきおみくじをめう月ふ  
みぢとよ吉月又えびの月新のせどよから風でさまくゆ  
たぬひわのうすすくすくらぬくゆう月  
いどりてめおひよもにやあこづくとあはるに  
よせてとぞすく月とめうすかをとよおねじ  
ゆきよぐ地、さりとげとよひゆきを飛やぬものひとに  
きぬとくくもがむかむかとれとあくよくすう  
きにとくめのくじくじくじくじくじくじくじ  
れつとべ本とくじくじくじくじくじくじくじ  
ハきくことまちりとくじくじくじくじくじくじ

五十二番

あまくまき月とくまきとくくはれほり光ひすねむらごく  
キムラノ門とみきうらうらまりけくのひらととよかのまえの月  
やのよきをあことけ可の翁  
清ひすり月あてすくめんじゆきいゆきうらうらうらの月を  
すがやきをよしおうせんじゆきいゆきうらうらの月  
たおどりよ歌ひのすくめんじゆきいゆきうらうらの月

つる



下

六



五十三事

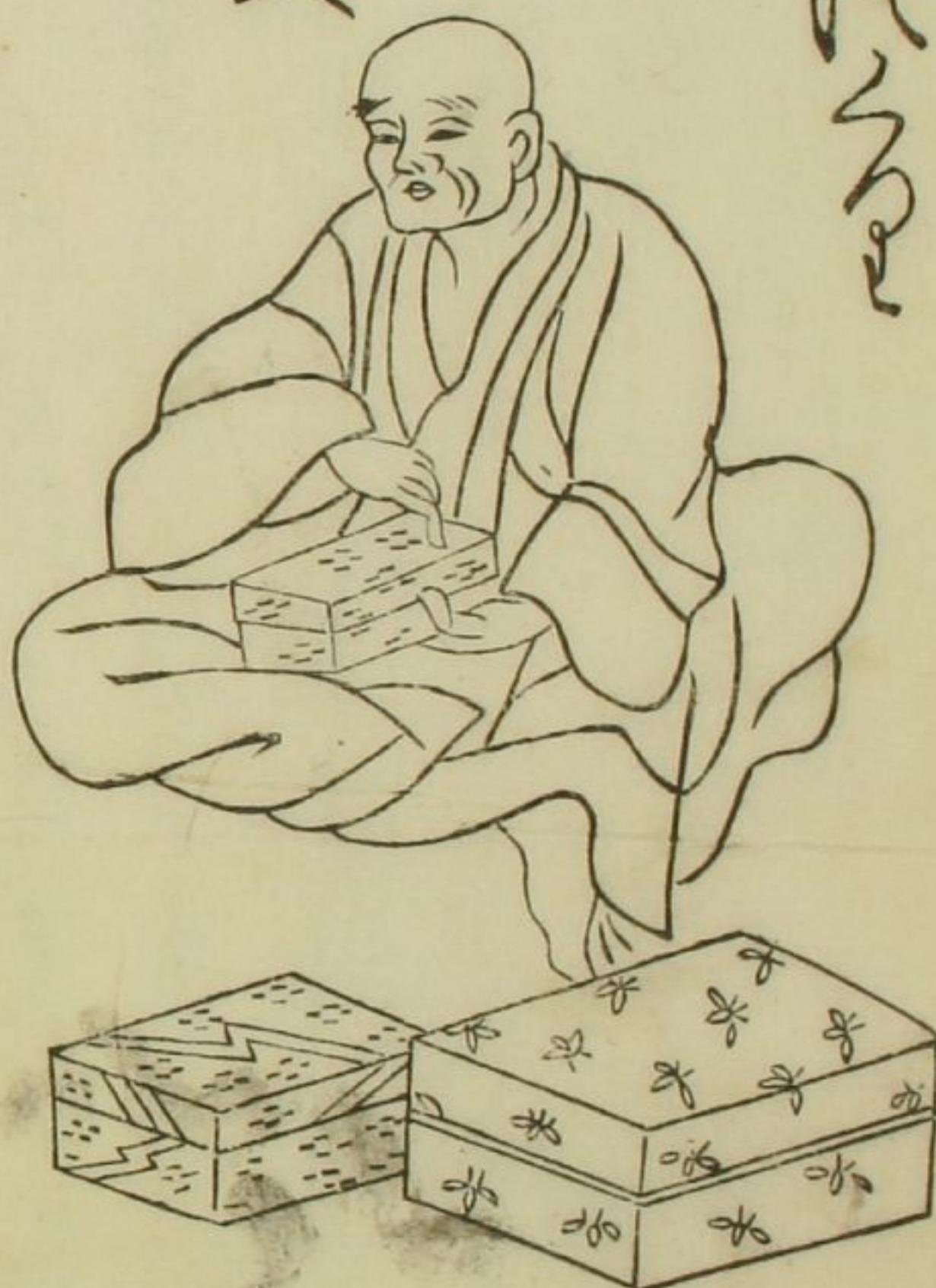
軍九事んをよひのうとくと、庭竹のそとうれのきる月新  
月うつゆのうすくに、おもてやかま行かとこれ  
た聞傳てきとも見えうて、おめよがく行け  
ぶみとせわうすうて、ほりうるくや  
秋無ひゆくらむれのひつうと、あくまき乳を拂はされ  
ひ事力がおさめうれのひひと、主膳にまよ人まく節  
たれすつねよらねとのぬわゆうやらすひまくいぬ  
さくは右おもくといふとぞこひされやがされま  
うもじきくとくと、縁乃とまよやらぬのまく  
ゆきんかとまづや左膳

つる籠のうき

下

七

菜籠なづか  
うき



かまぼこ

人ひと  
のうち  
らわ  
はづく

五十石ごじゆくせき

かづきそと籠なづかと身みをぞひ弱よわとめうのそうあひ弱よわの月つき  
籠なづかめうらよ奥おくつゝぬすあひも行ゆきづくと月つきを月つき籠なづか  
左右船さうせん左號さうごうてきとと生なまれ、月つきを守まつふかれ  
みくそうり仍いのちね

ぬすぬしよひに籠なづかひやて矢やのたけたけぬ、ぬ、ぬ、ぬ  
あとかうあぬあぬともされくさくさくのむかひゆううび  
者ものをもせのむ

下

八

矢さひり

これへらるの  
とそあすく  
じよそゆ

さひりいく



五十ス焉

くまびんれくひりもくぬ角をさうの角くすじに背や背  
せきをきりのくすじに背やしうぐれの白もくぬ角をさうの角  
をちやむくすじくすじかの  
こが壁はくさが壁はくさうのくさうのやうとくくくく  
れてもあするけねや町人のひびきうるわでれどそれ  
とおれを向情のね

下

九

ひきめくり

一ノアキモウヒサカハラ  
ヒツコトタガ  
ユア

ひりどさ  
ヒリ



辛十六事

あらじきとくわすはあはんまのゆをそぞるゆのせ  
刃がみのよみをくとあううつねりやされ毎月ねへと  
た年月みちとて金かられどけんまのまくらうん  
とくりてやあうんきひと金を済う異豆よりも  
それにはうれやれと申せられたるへる  
てあふありますあこびのをとぞりひき思ひれん  
わらきのやめのみよほあうのうのうのうのうのうのう  
を被ぬくとせよといひまりそむの  
いがとひへづくにうめある

金持

水うり



九十七番

背負ひかねと三つまつら筋てあくびうらあるの月  
ぬすりせんざんざんいうぐとくあくらもと筋骨とみれ  
たちやもよ筋もの筋もゆきとすりかづけをま  
まうまくもりての筋  
こひゆをよそくらうる筋びれとゆくやくそゆる  
いたるあきよしもみんらのねじあれての筋  
た筋庵すむな魚もくもいのうもじせりりぬ  
つと二音さうる鰐をとめうるえるるよめり  
せうとうこせましらのぬくゆをハヌミス原  
あゆくす勝

とくちよじ

下

上



四十八事

あともだのまかみそみうおがのうとあわきの月のね  
を西され河ひと徒乃すなつもまかててまほの月れを  
たおどもよらうまきゆきよめくわよてぬ  
さきはやくてももむかの事どりのとうキ吹くせどもも  
あのひあまふ風をひいたてぬし風りゆきれのせ月くみや  
たれみけうりや風く布うりほひゆくあそり  
右いすももくづくせぐとああをひとゆ勝

白の絹

ありの  
めせり  
とくぎりも  
とくじゆ



五十九番

春乃のゆすゑてふあきゆうのゆあやかをすてはる  
ひそとすれやあらめうりれのひぬき月のゆき  
おめうねみせりとくわくれゆとやゆと  
けきゆたひひくよ化なりはるの勝  
樹の里の鳥の羽とて候ふ所のあわざうのひき  
えきをかきゆうのゆのゆゆつゝにせきとくわく  
たあつかうにすきをきとくわくすみのゆ  
ともにとそかくとおとく

そくすき

ちうまきりとよ支  
かみとゆうり

いう程む

りさうり



卒畫

ゆくまとひまゆりのむらの月の夜と冬の角さみ  
ぬるそら國ふうあしてとあつ里とわがまよのうに  
た樹松の寒よれすをと車かと車  
しわたりやひるも月れおとふと鳥よそくれて  
やうくすゆおはもうりとかく歌みと角とち  
よされせたとすたうとてむなぐとてぬと勝  
りごとかく歌ひうるせだ實わねがやわるとかをえ  
をうれ唐人やてやあこゑの聲をうよくと聲  
はまゆりてもうえすとれわがまことうと今  
かわ

キムシナガラ

下

おまつすかうあらゆ

ほんちん

わんき

まぐん

わんじ



辛一書

あくをかづきあひてとさなうれど外をゆき宿のあ  
きりうるまわやまゆきあゆみのこきむるの月のあ  
た右ゆもよけちのふせより教き風もあ  
やもふもよすわね  
せんじゆのげんきじゆひ取やと草のぬくまくわいの  
ほくとまくやく人のせひあすれを女のまゆうれ  
まあれゆきらしとあくにすてあくをうの事  
とそとゆきえねのうね

山婦

下



辛ニ畫

さうてやそぬのものぢま持せぐてぬこれをほひ  
歩くや強あつむるとよすと月と夜と静ととしが  
たすみに宿この廻りとやそのれのれゆよつ  
豊ありおハ祐あと御事とねがへと素をと  
一ノ宿食ぬハが身あきふいゆと仇て後  
ヨリ急とひのれや人のあくや奇あくやきまよのと  
かまむひのうきちだひのうけりまかくをりくま  
おすすうあくにあきふいゆと仇て後  
や全もとさゆとれ可

卷之三

御やう御  
えど乃をひ  
風

卷之三



辛二書

まひごとく

もアハトニ取

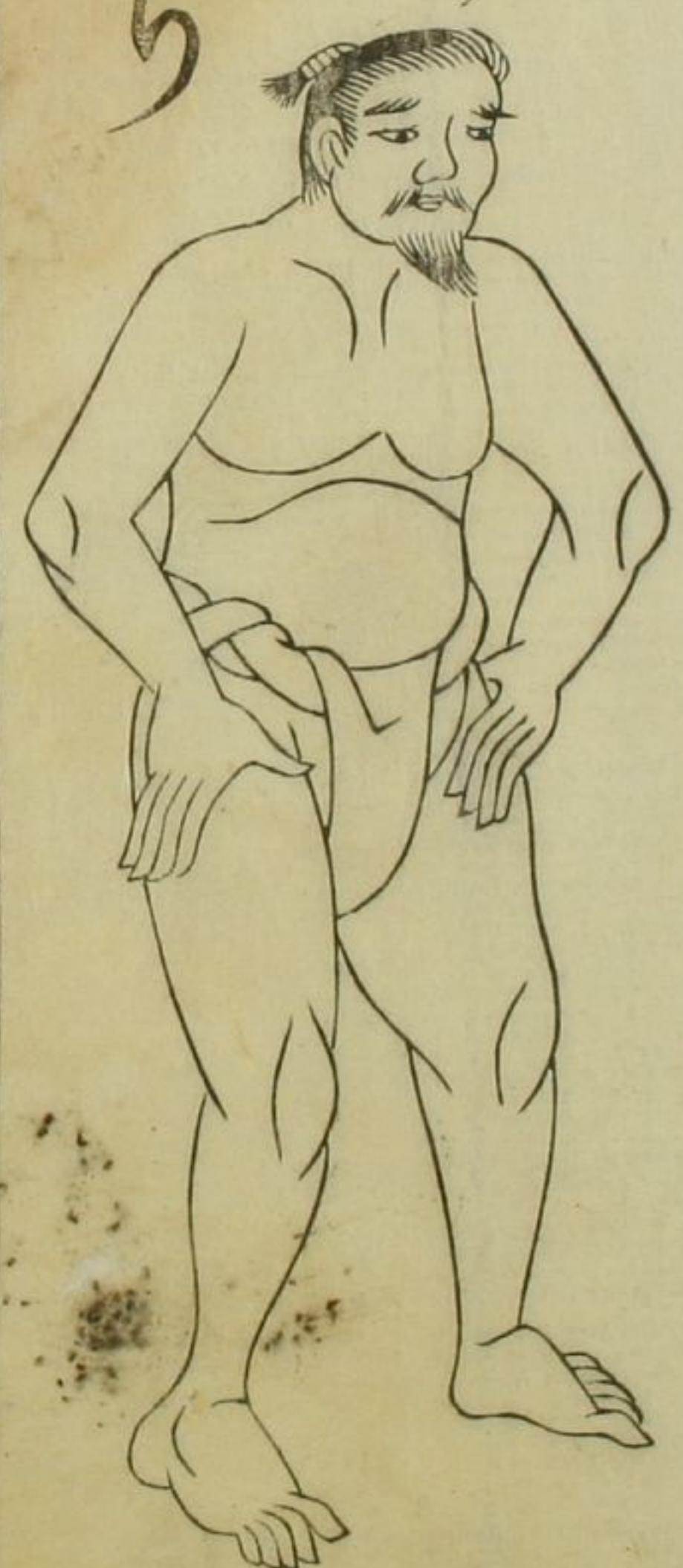
もアモリテヨク

まのいまたこの

女人のよ



通のサヘヨ  
相撲の筋り



辛の苦番

筋りのよしやうすてわからうぢやきの風を仕事の筋  
筋念のよきやうれすうまくはづねむかひもとひたどる  
たいせ程のゆくせ月みづらき代名とてとくめりや  
くもあくまくへきとく月を船かむぬ一右を  
きたひにじきて然あとあくつそじうやだつ  
及がくくや  
筋りのよしやうかんきよびひくみ称をむらう陸界のよきく  
中くふりれよくめぞおうんやくもとひいきこひくはれ  
たひあすれよれりんせばうけむらうと實へた  
ひよくめくんむくつゝ冠のよしむすくすくら  
かくにじうてれたと勝

律あり

ニ  
キヌのとよどもん、  
清不盡だつて  
うすみるを  
ときくはばか  
ひきをれ



律家

一まくげ別はよハ  
キドヤ船師ニハ

作のそ



卒ナ番

もむよびのやくわめつむよ心とあらうと、往うとがんと千を骨  
紙うとの月うてくらすすませのよむちうのまむけ、もと  
たなやとよりうをうと向まわねば、勝劣と備  
そへし

は生のまづらうとす、仰面の人をくもんむせり、未原りうふ  
百尺うとす、れども、夜影をナシヤリセモ、やうやう、物  
これよどむる船を駆むと便こう、ナ羅刹らぢや、セと思  
うけそり且、ひをうむるまく、よあくす、鬼ゆきの船  
もはあがむ船、うきと申めうとおどりに  
あうゑをうあ

卷之三

金仙家

扇假はもじらやく  
は生とよ一まいあそと  
こがく房格子と  
きみのくびひりん  
あるをほほけと

未満ん筋とね  
ちううのねばせば  
むとしゆハ紙あう  
織部は蓮と人の  
扇うれくやれと  
扇うれくやれと

法花家



卒六書

秋來り月すしや風の御りもゑ年とくまよとく  
りうなふのふくうんけぬやまだまくとれりとくに  
まや萬葉歌秘曲、も歌ゆりにまくやうくまく見  
うち語りひねとげりやた考へ隨ゆよお歌と題わ  
式のひうかのゆとあたすもくゆく内もやは是と  
よりておどとづくや

立とひく御よキじまのほら御すあさうを箇をすお  
別地とくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
ひと歌やうて金波のゆめと金波とあれよりあひ歌の  
納美乃は系からくーヌ歌の歌波の身辯うりはれ  
早年の種う年とねうううううううううううう

速歌

い角こう  
やりつゝ花り  
ゆすは



早歌うし

アミエヨのう



早歌

今や病を身に有る所と申す所も  
幼虫守やはあはてありひまきとよまも ももさははな骨  
左もともよ歌手とひそかに坐てひせをとれ  
されど左の肩とひそかに坐て右の肩となりてあふか  
生歌よりへとぬけりてや  
ゆき事は歌をとてなむからうとくのせは  
歌とくらむてにはどうぞう歌をにかくふとねがみ内  
きうちどくふかげとくの事はふるをく神とまむ  
ともとよれてもりとくがまくまく人のやうをわ  
らせつてんあまねあまやすの

ひき

下

四

うれはまけあ  
ぞうでんじハ  
ロド  
二  
侍實心をも  
ゆきをも安  
れもまんみ  
すすめうら  
初ハ腰を打  
シハ腰を打  
ミズクスヌ  
トウシタヒ  
モウソウ



一  
ひぐまくさん体を  
ひんまもとどもとよんよ  
三  
さじゆぢりそ  
根もくさん氣もよだ

さじゆぢりそ

辛八番

三のまゆをやまとひよそひやまくとよお見ゆ  
ゆんゆをやわのこまく風をあはくがくとくめくもく  
をひまきにゆみかひみくごとくの右あみの  
月とからくとほよきかくがくとくわね  
ひまをあみづかくまのやとくとくまくがくとく  
あくゆうたまくまもとくとくがくとくわくとく  
左一ひとてゆくとくとくとくとくとくとく  
おきは席ハ腰まよがくゆとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

下

山海經

乃  
爲  
之  
也  
不  
可  
以  
謂  
之  
無  
也



京九書

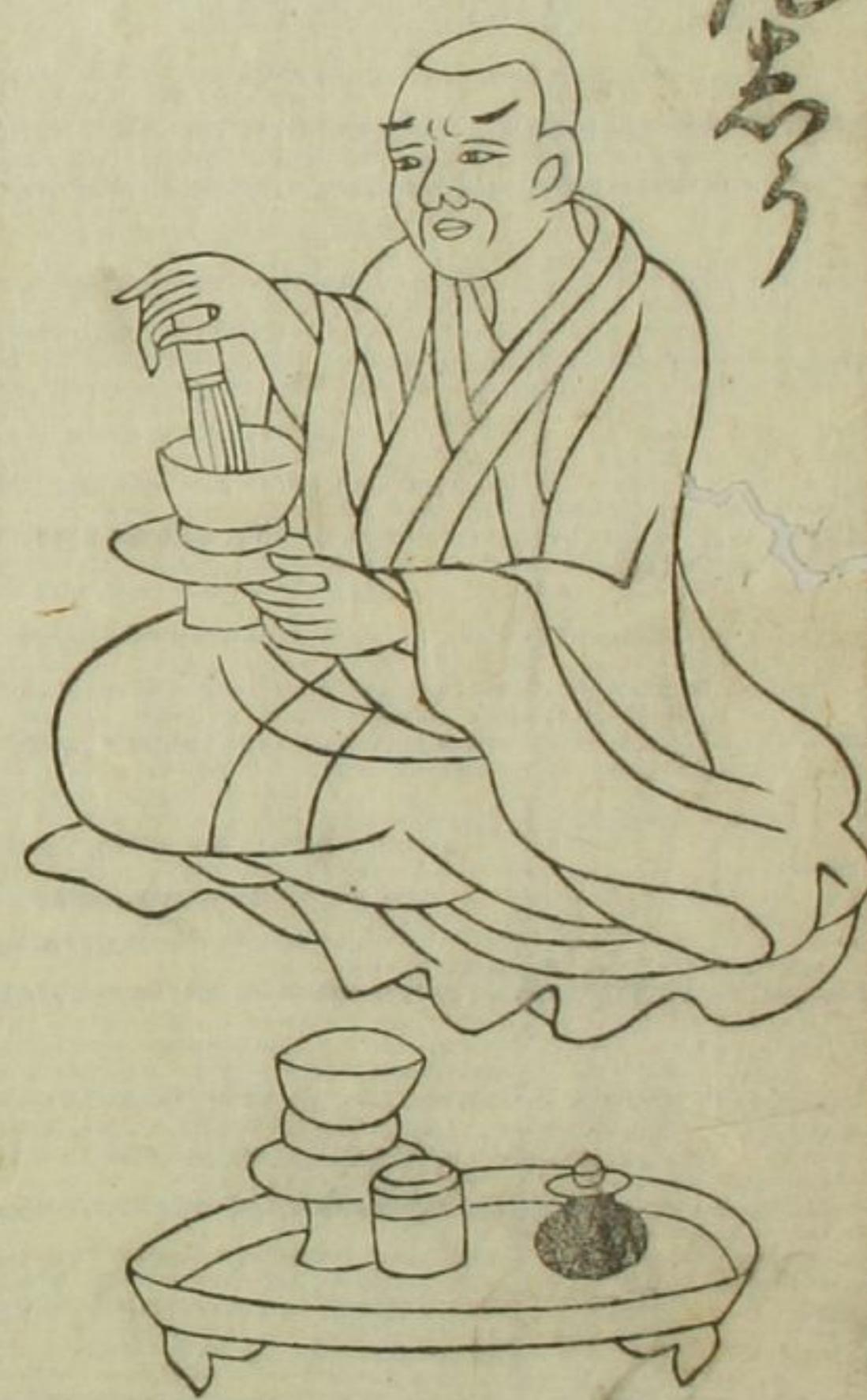
おもひはれりと人をつてはめよとおのづ  
まみよとをやすきはくわくにあをがれ  
たちやもぬれとせんじはくがゆる  
おんじはくと黒かあくみへとれはくと  
れしりゑまちうふ物もしむくあ  
ゆくれれまくとやうすをかね  
たれかく葉もとよからむとまく  
白くゆくとやくわくとくわくと  
たすきと新乃とせとくわくとくわくと  
とゆくとくわくとくわくとくわくと

仍右馬賈

金子うんちう

金の子

葉のうち



卷十三

やき乃ゆわ  
くわうら  
ひまゆりそ



草薙

御法事内主をにまねがひくととま月もみうきをね  
いさごくけつう廻くとやまくと廻月影と裏あばらのひづむ  
をたてこめのとまねがくとま月通れいとあえれ  
やと右入りか月とおすくとせんじゆてゆのく辛かの  
きほのまへとよせとまくよや（あつ）とまくよな  
か屬

吹魚下河下をもとあまの森を寄りやせうとまくと花  
神の森をまよひやまくとまくとひがくと花  
をもとよがのめりよがのめりとまくとまくとまくと  
うてうらむとまくとまくとまくとまくとまくとまくと  
アヤシムや下りくにまくとまくとまくとまくとまく

三十四

七十一番

物をこそうえよがれやはめをあまらすとくの月のけむ  
うねかんのよき乃あきせをすう月うす波とてこくあひて  
左のすりのくすとはまうえよどかのてと  
やくみやいへ右のうねかんのすくわゆくとくう  
半あらかてのまくらとおて  
りゆきてうねよひとあられつあふわとやくとめのま  
然みうれとくほぬこゑとあられとねぐらとあふらゆく  
たすい船にうへとあすやくとくして流してく  
とくふとよめうやまくとくとも右の下もろ  
一もり食をねうては



すりくら

あさくわ

角とめり  
ちくやくわ  
入てく



延享甲子仲秋吉旦

宝都書林

丸屋布施  
新作字海江  
右本居宣彦

